

ギリシャの詩 ー古典から現代までー

志田 信男

詩というのは若いころからのテーマで、今でも続けてやっています。先般、「ギリシャの詩ー古典から現代までー」というタイトルで講演をという話が浮田三郎先生からありましたが、実は最近ギリシャとは一寸離れた分野の仕事をやっています。ただ、ギリシャとは別に縁を切ったわけではなく、たまたま今少し違った方面の仕事をやっているというだけの話で、本来の専門は言語学及び西洋古典学な訳ですし、この機会に少しお話しできることがあればなあと思った次第です。といっても全くねたがなくては大変なのですが、たまたま昔の貯金といえますか、ギリシャの詩について書いた少しまとまったエッセイがありましたので、それをもとにその後の知見も加えてお話しできればと考えた次第です。

「潮流詩派」という、社会派を称する詩のグループ同人誌がありまして、1964～1966年にかけてこの雑誌に「ギリシャ・ローマの風刺詩」I～Vというエッセイを連載しました。今度の講演を機会に再読してみましたが、さほど問題点もないようですので、今日はこれをもとに少しギリシャの詩に対する僕の考え方をお話ししたいと思います。途中脱線したり、独断と偏見にみちた私見を開陳するかもしれませんが、お聞き流し頂ければ幸いです。もともと気が多いたちで若い頃から詩を書いたり、いろいろなことをやってきました。（詩としては、古典古代以来の伝統であるエピグラム形式の詩集『やばのろぎあ』I～VI、潮流出版社、1980～1991を出しています。）エピグラムというのは俗に寸鉄詩と訳されるように、風刺詩としては非常にすぐれた乗り物（vehicle）だと思います。最近また、今のような状態では、日本はちょっとおかしいので、やっぱりああいふ形のいわゆるエピグラムでの表現も必要かなと思っています。ただ、日本という国は、詩もそうなんですが、抒情詩でなければいけないというオブセッションがあって、なかなか滑稽なものとか、皮肉なものとかは受け入れない土

壤がある。で、僕がなんで詩を書いてるかっていうと、何年前ですかね、ねじめ正一っていう人がいますけれども、あの人が H 賞をもらったときに、僕も詩集を出しまして、僕の方もノミネートされてもよかったはずだったんですよ。そのときに、僕のグループの親分も H 賞の選考委員の中にいたんですけども、推薦しなかったっていうんですね。で、「お前なんでそんなことするんだ」っていいますと、いや自派のものを推薦するわけにはいかないって。そんなことはない、自派だから推薦しなきゃいけないのに。で、いろんな大詩人から手紙とかはがきを頂いたり、賞はともかく、評判が良かったので、それで調子づいてあれ一回出版するのに 5、60 万かかりますので、相当の気持がないとやれないわけで、まあ続けてきて、それが一貫して風刺詩なのです。

風刺に興味をもったのは、東大のころに、樋口勝彦さんという、慶応大学には伝統的に割りと立派なラティニストがいらっしやるんですね。で、樋口先生のユウェナリス【Decimus Junius Juvenalis, 後 60-140 年】、これはいわゆるサトゥラ（satura, ラテン文学固有の詩のスタイル。もともとはごたまぜ料理などの意の偶感・雑感の詩とされる。叙事詩の韻律に従う。後代の satire の原型となる。後出 68 頁参照）を書いた人で、ローマの詩人ですけど、その講読やっただすね。で、いかにも難しい。とってもじゃないけど、これは読めませんよ、と樋口先生に言ったら、いや、ラテン語というのは謡曲とか長唄とかをやるように、一番、一番やるしかないんだよ、と言われまして、また元気をだして、少しずつ翻訳を続けていたわけです。これはまだまとめてはいないんで一國原吉之助さんが翻訳を出したようですけれども【『風刺詩集』『世界名詩集大成 1』、平凡社 1960 年】、慶応大学の藤井昇先生とも一緒に出そうかという話もあったんですけど、僕の方もちょうど学園紛争に巻き込まれたりして、とても仕事ができる状態ではなかったので、そのままになっちゃいました。

それから、マールティアリス【Marcus Valerius Martialis, 後 40-102 年】の風刺詩は大学ではやらなかったんですが、読んでみると結構おもしろいんですね。これも、慶応大学から、藤井昇先生の全訳がでてるんですね【『マールティアリスのエピグラマタ』二巻、慶応義塾大学言語文化研究所、1973-8 年】。で、これ、世に知られていない。僕が非常に憤慨してるのは、岩波書店とかがああいうものを取り上げないんですね。要するに、一見深刻そうなものしか取り上げない。そういうと語弊がありますけどね。日本人というのは非常に好き嫌いが多いつていうか、思いこんだらそれしかやらない。モダングリークもそうですよね。昔は「あんなのギリシャ語じゃないよ」っていう大先生もいたぐ

らいで、これは『セフェリス詩集』（志田信男訳、世界現代詩文庫 14、土曜美術社 1988/1991）の僕の論評の中にも書いてありますけどね。そうじゃなくて、ギリシャ語ってというのは終始一貫ギリシャ語なんで、いろいろに形を変えたけれども、言語の変化の流れの中ではやっぱり、総合的な言語から変化しつつ、分析的な方向に向かう流れがあるといえます。例えば、個別的ないろんな現象がありますよね。イオタシズム [i, v, η, ol, ei 等が現代語では同じ[i]の発音になる現象] とかあるいは不定法がなくなっちゃったとか、いろんな現象があるわけなんですけれども、やっぱり一貫した進化の流れの中で、ギリシャ語であるというアイデンティティがあるわけですよ。

セフェリスにまつわる話ですが、1980 年代のある日のこと、本郷三丁目の福本書院という割りとアカデミックな本のあるところで、その店頭で『セフェリス詩集』を見つけたんですね。非常に薄い本です。もちろんアンソロジーなんですけど、カバーがかかっておりまして、1963 年ノーベル賞受賞作って書いてあるんですよ。これは面白いなと思いました。この本はエンツェンスベルガーという人が翻訳した、独訳とギリシャ語と対訳したやつなんですね。これを買ってきまして、いずれ翻訳してやろうと。僕もいろんな言語をかじってますけど、これは本当にかじってるんですけど、その学習の方法は、何か 1 つ作品を決めて、それからとっかかってやっていくのが、一番興味があっているのかなと思っています。ですから今、アラビア語も始めたんですが、これはアヴィセンナ（アラビア名 Ibn Sinâ. A.D. 980/985-1040、イラン系のアラビア医学者、哲学者、詩人。その主著『医学規典』は 17 世紀にいたるまで西欧の大学でも教科書として使用された）を軸にしてやろうと思っています。ちなみに今秋、アヴィセンナ『医学の歌』（志田信男訳、草風館、1998、10）を上梓することになっています。また、ずっと前に、実は、学生時代にイタリアに留学しようかなと思って、イタリア語もやったんですが、これは、ダンテから始めようと思ったわけです、もう大分忘れちゃったけど。じゃあ、モダンギリクをやるのは、このセフェリスを拠り所にしてやろうと。そのうち、E・キーリー訳 (E. Keeley & Philip Sherrard, *George Seferis, Collected Poems*, London 1982) などいろんな本が入ってきましたから、少しずつ翻訳してたんですが、そしたら土曜美術社という、今でも『詩と思想』といういわゆる詩の中央誌を出版していますが、その雑誌の小海永二というーこの方は仏文学者ですが、ロルカとかスペイン文学の翻訳もわりとやっているし、アンリ・ミショーの全集も訳してるといいますー彼が当時『誌と思想』誌の編集長だったと思いますけど、この人がギリシャ

について何かやってみないかと。で、「ギリシャの詩」なんて講演を、「ポエムセクション」なんていう会（土曜美術社主催の詩の朗読や講演の会）で土曜の夜にやったりなんかしてるうちに、じゃあ、『セフェリス詩集』を土曜美術社で出版しましょうということで、あの本がでることになったんです。やってみますと、セフェリスというのはやっぱり、とってもおもしろいのです。今日、後で結論のところ、古代ギリシャからの詩の流れと現代とどう結びつくのか、についてお話ししようと思います。明らかに途中、切れてるわけですね、中世以来。ビザンツ、まあビザンツはあったけれども、ビザンツで古代ギリシャのああいう詩の精神がどのくらい生きてたかっていうのは問題で、再認識されるのはやっぱり独立戦争の頃からだと思います。そういうことで、モダンギリークをやったわけです。

ところで、僕は学問をやっている、すぐ、自分の生き方とか現代とかとすぐ結びつけるくせがあって、本当はよくないですね。学問というのはそうじゃなくて、もっと切り離して客観的にやるべきなんです、それだけじゃどうも飽き足らないというところがあるもんですから、悪口をあちこちで言ったりするんですね。いわゆる詩人を自称している人々の中には非常に深刻な詩を書く人もいるわけです。現代詩っていうと訳のわからないことを書くのが詩だと思っている人がいっぱいいる訳ですよ。そこで皮肉る訳です。「君の詩は難解だけれど、君の生活はものすごく分かり易いんだね」って言うんですよ。子どもを塾にやってね、それで住宅ローンで家建ててね、それで、書いていることがばかに深刻じゃないかって。全然深刻じゃないよ、君の生活は、って言うんだけど。専門家っていうのも、同じですね。例えば、どの専門家でもいいわけなんだけど、プラトンでもなんでも、立派な専門家はいる、そりゃあもう、アレクサンドリア以来の学問の流れがありますから、膨大なもんですよね。その流れの中で本当に何か付け加えたとすれば、ほんの 1 つ付け加えられれば、学問としては成功だと思うんですけれども。にも拘わらず、まあ、近代哲学でもいいですけど、俺はヘーゲル—この頃はヘーゲルは流行らないけど—の専門家だっていばる人がいるわけですよ。だけど君はヘーゲルじゃないじゃないか、というのが僕の風刺のやり方なんですけどね。ソクラテス的な方法かもしれませんが、専門家っていうのは、自分の学問はピンポイント的に深めなきゃならないけれども、それでごり高ぶっちゃいけないと思うんですね。人間としてはただの人なんだから。そういうことをここでいうのは釈迦に説法なんですけれど。そういう姿勢でやってるわけです。特に詩なんていうのは、何千年何万年の隔

たりがあっても、シュメールや古代エジプトの詩から現代の詩まで、やっぱり人間が生きる、死ぬ、恋をする、失恋する、そういうことが主題になってますよね。だから、そういう点では、人間性というのは決して進歩してないんで、一見進歩してるのは文明だけですからね。そういうことで、そろそろ本題に入って、お手元の資料を少し読んでみましょう。

「ギリシャ・ローマの風刺詩は一体どのようなものであったか」という本論に入る前に、20世紀後半の今日の僕が、風刺詩、それも特にギリシャ・ローマのそれを論ずることにどのような意味があるのか、ということ論じてみたい。僕は以前から現代詩の時代閉塞の現状を打破する1つの方向ということで、風刺性の導入ということを考えていたが、これはまた広い意味での社会性の詩、批評のある詩ということでもある。風刺は本来高度にロゴス的なもの、すなわち透徹した批評精神を前提とするが同時に根源的には強いパトスによって動かされているものである。それは時事的なもの、人生の具体的な諸相に触発されるものであり、本質的に現実に着したところからしか発生しないのである。それは一見人生一般、社会一般に対する一般論として表明されたとしても、本来詩人の具体的体験、実感に基づいている。それは客観的な知性と同時に現実世界に存在する不合理や不正に対する鋭い批判と情熱を前提としている。それが、時に尚古主義に形を借りることがあっても、本来その姿勢は前向きなのである。また風刺はサーカスムのように毒舌の針を直接あらわに対象の胸元に突きつけるようなことはしない。それは時に専制君主の下でのやむをえないかくれみのものであることもあるが、同時に作家の自己を含めた客体を対象化するウィットやフモールの精神と結びついている。このようにして、風刺は嘲笑や冷笑や様々の笑いを含んでいる。ギリシャではイアムボス詩という風刺詩が古典期以前にすでに存在していたが、やがて、古典に入ると喜劇が風刺の機能を担うようになるのは偶然ではないのである。風刺は本来、笑いの文学なのである。日本でも、古来、狂言・狂歌・川柳がその機能を果たしていたが、今日主としてコメディアンからなるボードピリアンや新聞・雑誌ではコミック・ストリップスが風刺になっているのは、それなりの必然性があるのである。ところで現代詩が空虚な深刻がりを示しているうちに何時の間にか『現代詩第二芸術論』（森川達也・詩と亜流・詩学三月号）」この論はもう随分古いんですけど、「までが飛び出している現状を僕らは否定することはできない。僕がここで現代詩にもっと風刺性をというのにはこの現状打破の一方策としてなのである。それもクソリアリズムやイデオロギー偏向の詩ではなく日本の現代詩人たちがシ

ムボリズム・モダニズム・イマジズムなどの詩から今日の現代詩にいたる経過の中で身につけた高度のアルス（技術）を駆使して、なおその上に今日の歴史的現実の証人としての批評精神・風刺精神の表現を、そしてほろ苦い笑いを組み入れていくことなのである。今日僕らのおかれている現実には戦中戦後の一時期におけるいわば負の意味での限界状況を裏返した一種の極限状態を呈しているといつて過言ではない。この時点に立って、僕らはいたずらにいらだつばかりでなく、この状況の主体的な証人となって、現実をもっと風刺し、茶化し、嘲笑し、冷笑してよいと思うのである。僕は詩というものは何よりも詩人の存在の証明でなければならないし、またそれ以外ではありえないと考えている。高度成長の中での底辺の拡大、階層のピラミッド化、充足の中での欠乏と挫折感、安定ムードの中の不定愁訴、オリエンテーションのない若いエネルギーの暴発など、このような状況の中で僕らが観念の世界に逃避し、問題意識を欠いた詩作に耽溺し、仲間内の慣れ合いや仲間ばめに明け暮れてはいられないだろう。僕はこのような袋小路に入った現代詩の1つの活路として、もっと風刺を主張したい。さて古代ギリシャ・ローマはヒューマニズムという意味で僕らが所有している殆どすべてのものを先取りしているといつてよい。この意味でこの時点でギリシャ・ローマの詩人が彼等の時代とどのようにかわり合い、その風刺詩はどのような普遍性と特殊性の上に立っていたかを展望することは決して無意義ではないであろう。」

日本の詩壇について一言しますと、その状況は本屋さんに行くと分かるんですね。詩の棚はないんですよ。詩歌、または俳句、和歌の棚はあるんですね。だけど、詩だけの専用の棚はまずない。それから、素人—素人っていうのはおかしいですね。皆が詩人に成り得るわけだから—、素人の方は詩っていうと、あ、もう詩は分かりませんからって、最初から拒絶反応がある。そういう状況が今でも続いているんじゃないでしょうか。ただ、最近は割りと分かりやすい詩を書く人が大分増えてきましたね。僕の友人なんかでも、この間、資生堂の花椿賞をとって、文部省の芸術選賞をとった八木幹夫君っていうのは僕の家のおそばに住んでるんですけども、受賞作『野菜畑のソクラテス』なんていうのはなかなかおもしろい批判とユーモアと叙情のあるいい詩集です。だから、まあ、まんざら捨てたものじゃないなと思うんですけど、大状況としては依然としてそういう状況があるんじゃないかなと思ってます。それと、日本の1つの特徴としては、一回やり始めたらやめないということですね。例えば「未来派」っていうのがあるんですね。この「未来派」っていうのは、第一次世界大戦前

後から第二次世界大戦にかけて、流行った芸術運動ですよ。ですから今世紀初頭から中葉にかけての芸術運動だと思うんですけども、今だに「日本未来派」っていうのがあるんですね。で、これがね、会員はみんなおじいさんですよ。ひどいのは 80、90。ひどいっていったら怒られちゃうけど。自分だってもういい年なんだけど、なんでお前たち未来派なんだ、過去派じゃないかっていうわけです。その未来派の親分衆がいるわけなんですよ。ヨーロッパにだってね、エリオットとかエズラ・パウンド、まあ、いろいろ大詩人はいますよね。一体その人たちが派閥をたてているか。いないと思うんですよ。日本はね、1つのグループを作るとね、みんな俳諧の宗匠みたいに親分、天皇になっちゃうんですね。しかもそれを継続していく。未来永劫。それで、NHK のラジオ体操とかね、あれと同じだと思うんです。あとのご自慢も同じ。戦後から始まって、延々と、あれきつと千年先まで続いていくんじゃないですかね。こういうところが日本の詩の世界でもあると思うんですね。日本人の性格かなとも思うんですけど、やっぱり、本質的なことを考えないとね。こういう雑談ばかりして申し訳ないんですけどね、ついでにもう一つ。辻征夫っていう人がいるんですね。これは結構有名な詩人で、面白い詩を書く人です。彼がね、「歷程賞」という大きな賞を取ったんですね。「歷程」という大きなグループがあって、草野心平とかあいう長老がいたところですけども、友達だから授賞式に僕も行っただんですね。その時、2人受賞したんですけど、その受賞の挨拶があったの。で、1人はね、その後消えちゃったんですよ。彼は、せっかく「歷程賞」のような大きな賞をもらったんだから、今後は真面目に精進してね、「堅忍不拔」、「不撓不屈」の精神で—こんなことは言いませんよ、実際にはね—、一生懸命詩をやりまっすっていったんです。で、辻征夫がね—これが面白いんですよ。これ以来、僕は彼のファンなんですけど—「僕は一生懸命やりません。今まで通りぶらぶらしてます」って言ったんですね。こりゃ詩人だなと思いましたね。それ以来、いい仕事やってますよ、彼はね。脱線しましたが、ちょっと違う世界の話もいいかなと思って。じゃ、ちょっと読んでみましょう。

「ギリシャにおける風刺詩の伝統は古い。すでに叙事詩の時代から、マルギーテースや蛙鼠合戦のような滑稽叙事詩が存在していた。」まあこの辺は、高津春繁先生の『古代ギリシア文学史』（岩波全書）が参考になると思いますし、詩については、*The Oxford Book of Greek Verse* (Oxford 1930 [1951]) にあるのが、自分が使った中には一番多いと思います。「マルギーテースはこの名をもった何でも屋で何事にも一応手を出す、どれ1つとして物にならないという半可

通の人物を主人公とする詩で作者不詳である。」これはね、まさに自分が言われてるんじゃないかっていつも思うんですけどね。で、ちょっと読んでみますけど、

「あの男はいろんなことを知っている。／だが、何1つとしてまともに／知っていることはない。／あの男を神々は／畠の掘り手とも耕し手とも／されなかった。／またその他の何か一芸に秀でたものにも／土台、あの男はテクネーというものを／欠いているのだ。」

この時代にすでに「テクネー」ー紀元前7世紀ですよーという言葉が、そういう「アルス」という意味で使われてるってことですね。

「アルキロコスはこの詩をホメーロスの作としたがアリストテレースもまたそう主張している」と、まあ、こういうふうに、当時も自分で内心忸怩たるものがあるって、「これは僕のような雑学の徒にとっては身を刺されるように皮肉な詩である」と、一応反省しておいたわけです。

ちょっと飛ばしまして、5ページの終わりの方ですね。ベンジャミン・ファリントンというのは『ギリシャ人の科学』（出隆訳、岩波新書上下、1950）の著者で、これはなかなか名著なんですね。マルキシズムが崩壊した今でも名著だと僕は思うんです。マルキシズムというのは、すべてが駄目なんじゃなくて、その直線的な発展段階説はともかく、やっぱり1つの立場を持った歴史観だと思えますね。「ファリントンが指摘しているように、知識が生産技術から遊離して知識階級の独占するものとなるのは古典期アテナイ以降のことなのである。僕は風刺詩というものはまず曇りのない批評精神を前提としていると思うが、この意味でこれから触れるアルキロコスもセーモーニデースもクセノパネースも共にイオーニア人であることは偶然ではない。やがてタレースによって始まるイオーニアの自然哲学を可能としたイオーニア精神によって初めてマルギーテースを始めとするギリシャの風刺詩の伝統は可能だったのである。」

古代の抒情詩で、必ず挙がるのがサッフォー【Σάπφω, 前600年頃】とか、アルキロコス【Ἀρχιλόχος, 前650年頃】なんですけども、サッフォーはすばらしい世界ですよ。最近またいくつか翻訳が日本でも出たんですけど【沓掛良彦『サッフォー 詩と生涯』平凡社、1988年】。また、アルキロコスというのは非常に痛快な人で、「彼を紹介する前に当時のギリシャの歴史的状況について一言しよう。周知のように紀元前8世紀頃ギリシャはいわゆるミュケー

ナイ文化崩壊後の暗黒時代、ギリシャ史における中世を経て、新しい Sturm und Drang の時代に入った。王制は徐々に衰退、都市の発達、人口の増加に伴う植民の展開につれて、商工業が発展し、職人・商人階級が実力を持つようになる。貴族たちは互いに権力を競い合い、民衆も自我に目覚め、自己主張を始める。個人の自覚が始まる。そしてこの間、貴族、民衆、農民、牧者など、各階層間の複雑な斗争の過程をぬって、テュラノスすなわち独裁者が出現してくる。このような情勢の中で文学形態は没個性のアノニマスな叙事詩から個人の感情や思想を表現する叙情と風刺詩の段階へ移行する。アルキロコスはこのような個人のいわば覚醒の時代の出発点にあって、風刺詩の詩律とされるイアムボスを始め、種々の詩律考案を実験したのである。彼は古代においてすでにホメロスと並ぶ大詩人とされ詩神ムーサの使者とさえいわれていたのである。彼の年代はかなり古くその作品の中で日蝕を歌っているが、この日蝕は前 648 年 4 月から 711 年 3 月 14 日のどちらかであろうと推測されている。パウラを初め後者をとる学者も多い。いずれにせよ前 7～8 世紀という早い時期に強烈な個性を発揮した詩人である。」で、断片ですけど、

「槍にこそ僕の捏ねあげられたマーザはある。／槍にこそイスマロスの酒がある。／そして槍に凭れて、僕は酒を飲む。／あの楯を、サイオン人の誰かが大満悦で自慢の種にしているだろう。／あれは完璧だったがやむを得ず茂みの中に捨ててきたのだ。／だが僕自身は死なずにすんださ。／なにあ、あんな楯などくそくらえだ。／また新しく手に入れるさ。あれに劣らないやつを。」

僕はギリシャ人社会というのはやっぱり、ルース・ベネディクトの恥の文化だと思うんですね、あのイーリアスなんか読んでも。だけど、この時代にこの詩人は非常に冷めてる。乃木大将が西南戦争で軍旗を奪われて、これが一生のトラウマになってですね、最後に明治天皇への殉死にまでつながったという説がありますよね。やっぱり軍旗を奪われるとか、ラッパを奪われるとか、武士にとって盾とか刀を奪われるってことは大変なことだったはずなんです、ギリシャにおいては。だけど、それを平気で笑い飛ばしてるわけですね。あんなものはまた買えばいいんだって。これがすごい、むしろ近代的ともいえるような、その知性というか根性だと思うんですね。

「僕にとってはあの黄金にみちたギューゲース王の富も関係ない。嫉妬も僕

を捉えたことはないし、神々の業績も僕は羨みはしない。広大な独裁者の座を求めもしない。なぜって、これらのものは僕の眼からは、はるかにはなれた所にあるからだ。大將軍で奴、僕は好きじゃない。飾り立てた奴だ。巻毛にしたり、半分剥って得意然としている奴もだ。そんな奴じゃなくて、僕には小さくて、すねの曲がった奴がいてくれさえすればいいのだ。しっかりとした足取りで歩き、勇氣リンリンとしてさえいれば。／狐はいろんなことを知っている。だがはりねずみは1つだけだ。一でっかい奴を。」

なかなか気概のある人ですね。この人の出自ですが、「アルキロコスは大理石の産地として有名なエーゲ海上のパロス島に、貴族テレシクレイアと奴隷女エニペの間に生まれた私生児であった。そして長ずると当時の資産のない貴族の常として、傭兵として戦争と酒と女の生活に身を委ねた。」ということで、後の方に、「ギリシャ人の生活はどちらかというとルース・ベネディクトのいう恥の文化に属しており、武人の面目を非常に重んずることはイーリアスなどにもよく表われている。そのような精神的風土の中であえてこれだけの放言のできるど根性は賞賛に値するものである。と同時にペロポネーソス戦争の真っ最中に堂々と風刺劇を上演したアリストパネスを可能としたギリシャの自由がこの背景にもあることを否定できない。」これはちょっと飛躍かもしれないけど、こういう議論をしています。

それから詩の形について「風刺詩はギリシャではシロイ（σίλλοςの複数形）とあったが、それは本来、斜眼、横眼を意味している。アルキロコスの姿勢がまさにそのようなものであることはこれらの作品でうかがうことができよう。風刺詩が教訓詩や寓話から自己を区別できる本質的な点は詩人のこのシロイ的姿勢にあるといえる。ローマの風刺詩がサトゥラであり、本来雑多ごたまぜ等の意の偶感の詩であったという意味ではより根源的であったといえるであろう。なお、サトゥラは英語のサタイアの語源であるが、これに今日の風刺に近い意味を与えたのはユウェナーリスであることがいうまでもない。」

次に、アモルゴスのセーモーニデース【Σημωνίδης, 前7世紀】の詩が挙がってますけど、わりと古代の詩人てのは女性を批判するのがあるんですね。

「原初、神は女性の性を様々にお造りになった。ある種の女は剛毛の生えた牝豚からで、家ではすべてのものが泥に塗れて乱雑に散らばり、地面に転がっている。彼女自身はというと、身体も洗わずに洗濯をしない着物を着て、糞堆

に座って肥え太っている。／また神はある種の女を抜け目ない牝狐からお造りになった。この種の女は何事でもわきまえていて、良きにつけ、悪きにつけて、彼女の眼を逃れられるものはない。彼女はちょいちょい悪いことを言うが、良いことも言うのだ。次から次へと気持が変るのである。 ... 」

でも、これは女性に対する愛の裏返しなんですね。悪口を言うっていうのは、結局。これが、やがて古典期の「古喜劇の笑い」になると、

「古典古代のギリシャの風刺詩を論ずる際まず問題となるのは、いうまでもなく喜劇詩人たちによるギリシャ古喜劇である。副題に『古喜劇の笑い』としたゆえんである。すでに前稿でかなり明らかなように、古典期以前の風刺詩はどちらかというとな人生一般に関するものが多く広義の風俗風刺のカテゴリーにおける教訓詩や寓話の伝統との関連からも看過することのできない点である。殊に、この場合寓話的発想が風刺と結びついているということ自体が風刺の性格を規定しているように思われる。古喜劇の合唱隊が蛙、鳥、蜂などのような動物の姿で現れたことは、その動物無言劇としての起源を暗示するだけでなく、このような風刺における寓意の伝統との関連という観点から考えるべきかも知れない。ところで、古典期、前5世紀のギリシャ、殊にアテーナイの完成期のポリス社会は極めて政治的な社会だったといえることができる。もちろん、ここで僕が政治的というのは *Politikos* という本来の意味においてであることはいうまでもない。ソロン、クレイステネース、ペリクレースの系譜において完成したアテーナイのポリス社会においては、市民は大幅の民主的政治参加の権限をもち政治批判や、政治家・思想家に対する直接、間接の時にはえげつないまでの人身攻撃までを含む自由があったのである。アリストパネスを代表とするいわゆるギリシャ古喜劇はこの時代の民衆の鋭い政治批判や激烈な風刺の主要な道具であった。」

ギリシャの古典劇とか、そういうものは一回限りのものだなあ、と僕は思うんですね。その後、どの社会でも生まれてない。あるは非常に特殊な環境で生まれた。しかし、一回限りの特殊なものであるけれども普遍性を持っているということじゃないかと思う。「古典期アテーナイにおいて悲劇と喜劇の果たしていた社会的機能は、すでにホメーロスに見られる詩人の職能の2つの面のそれぞれに明確に対応している。すなわち、悲劇の任務は神意と神の世界を民衆に啓示することであり、その際詩人は神と民衆とを媒介する、いわば解説者、エクセゲテスであったとも考えられる。ここでは詩人はローマの古い預言者

的詩人の概念ワーテスにも比せられる姿で現われる。ペルシア戦争前後のアイスキュロスの姿はこのような詩人像においてのみ理解されるのである。一般にギリシャ宗教はカノンを欠き、エジプト・バビロニアを始めとする古代オリエン特諸民族におけるような神と信者の仲介者としての神官の役割をもたなかったといわれる。」沢柳先生はこの間亡くなりましたが、「沢柳大五郎氏がギリシャ神話は不断に生成流動して居り決して固定したテキストを成さなかった。その生成する神々のイメージを純化し、書き出したのが詩人であり、美術家であった。したがってギリシャ美術は一キリスト教美術や仏教美術のように一經典の挿絵でも絵解でもない。美術者は神話の解釈者であり、創造者でもあった。」（『ギリシャの美術』岩波新書、1964）と言っているのはまさに正鵠を射ているわけです。この辺はまた感想ですが、「今日の僕らもまたカノンを持たない。そしてこの事実が僕らの自由の限界でもあり、可能性でもあるといえる。現代詩の直面している状況についても同様である。現代詩もまたカノンを欠いており、不断に生成流動している。それは自由に対して負わされた運命といえる。」

アリストパネースの喜劇などの、そういうクールな批評精神というのは、例えば、ソクラテス以前の哲学者の中にも結構出てるんですね。例えば、クセノパネースなんていうのは、神様を相対化してますよね。例えば、「アイチオピア人たちは自分たちの神々が獅子鼻で、真黒であると言い、トラケ人たちは青眼で、赤毛であると言っている (DK. 21 B 16)」（山本光雄訳編『初期ギリシャ哲学者断片集』岩波書店、1958, p. 28）と。つまり、それぞれの民族が神を持ってるんだという言い方をしてますけど、そういう精神の延長っていうのはずっとあるんじゃないかなと思います。

ですから古喜劇っていうのは非常にユニークなもので、5ページの上の方に、「古喜劇は世界史上一回限りのユニークなものであり、今日僕らがコメディの名の下に想像するいかなる文学作品とも本質的に性格の違うものである。サトゥラがローマ文学における固有の、ユニークなものであると同じ意味で、古喜劇は悲劇と共に古典期アテナイのポリス社会に固有の独自の文学形態なのである。喜劇としての普遍性ということを用いるならば、エピカルモスにすでに萌芽の見られるメナンドロスによって完成する中・新喜劇の系列の方がオーソドックスであるといえる。それと同じ意味でギリシャ史とギリシャ文学を論ずる場合、古典古代は最も特殊な時代であると思う。」これは僕の意見なんです。「この点が大切なところで、この意味で僕はギリシャ古喜劇及び悲劇の本質を追及

することが古典古代の本質解明のための不可欠の条件であると思う。ベルグソンは『笑い』においてモリエールの喜劇における『笑い』の美学を打ちたてたといわれる。もし喜劇の本質が、そして一般に風刺文学の特質の1つが『笑い』にあるとするならば、僕たちは今後、古喜劇における『笑い』の美学を構築する必要がある。」でも、これちょっと真似できないですね。こういうこといったらちょっと矛盾なんですけれども。「古喜劇における風刺・嘲笑・人身攻撃・糞便趣味や猥雑趣味・パロディー・洒落・地口などに関する笑いの理論を作り上げることによって古典古代の独自性を把握できると思うのである。そしてそれは今日なお真のデモクラシーとは何かという深刻な疑問に捉えられている僕らにとって無意味ではないであろう。後述するように、古喜劇の1つの本質的特徴は『論争』を中心とするポレミックな性格である。アリストテレスの『喜劇は人間を現前の人々よりも悪しく描き、悲劇はより善き人間を描こうとする』という定義はあまりにもスタティックである。」

もう時間がないようですから、少し先に行きまして、古代末期の詩人を取りあげたいと思います。で、この「ギリシャ・ローマの風刺詩」のⅢ「アレクサンドレイア・ローマ時代のギリシャ」ですね。これも、途中省きまして、アレクサンドリア時代のパラダース【Παλλαδᾶς, 4世紀頃】という詩人をご存知だと思うんですが、これはいわゆるグreek・アンソロジー（『ギリシャ詩華集』）の中に登場する詩人ですね。この人はですね、古代末期をはっきりと表わしている詩人だと思います。

「やがて古代ギリシャ文学史における」これは13ページが一番おしまいのところですが、「ローマ時代に入るともはやギリシャ文学は辛うじて古代の余光の中でほの白い光を発するにすぎず、それは風刺詩においても例外ではなかった。しかし、散文の世界ではルーキアースが人間世界を高い地点から鳥瞰する方法で人性及び神々を風刺している。…この時代の風刺詩を論ずる際忘れることができないのはエピグラムである。エピグラムは古くからあった。本来は『墓碑銘』」墓碑銘とは限らないんで、何か物の上に書きつける短い文章という意味だと思うんですが、「短詩形文学であったが、時事的問題に触れ易かったその性格からやがて風刺的性格をおびるようになった」わけです。墓碑銘というのはエピタフといいますけど、エピグラムはこれとダブる場合もあるわけです。「ネロの時代のギリシャ作家ルーキリオスによって風刺的性格を決定的なものとした。彼はローマのエピグラム作家マールティアリスにも影響を与えたと考えられている。彼は今日の意味でのエピグラムの創始者の1人である。エピ

グラム作家として風刺的性格をもったものには他にニカルコス、バラダース」これは紀元 400 年ですから、5 世紀の人です。「彼らの作品は主として『ギリシャ詩華集』に収録されて」います。『ギリシャ詩華集』は最近、沓掛良彦先生の訳で、きれいな本で、『ピエリアの薔薇』ですか、きれいな詩集ができましたけど【書肆風の薔薇、1987 年】、膨大なもんですよ。日本では、さっきの話にもなりますが、ああいうものも、本当ならば全訳があってしかるべきですよ。だけど、まだまだそういうところまで行ってないと思います。

ルーキリオス【Λουκίλλιος, 後 102 年】の「弁論家に」は読むのを止めまして、下の方の詩ですね。これ、医学の批判で、僕も時々こういうの書くんですが。昔からお医者さんっていうのは同じような人がいるわけですね。

「ディオパントスは夢にお医者 of ヘルモゲネースを見たので、お守りを身につけてはいたんだが、それっきり目を覚まさないかった。」

これは、藤井先生の訳です。

それから、ニカルコス【Νίκαρχος, 後 2 世紀頃、詳細不明】の作品ですね。

「ゼウスの石の御像にきのう／医者 of マルコスが手をかけた。／と、石であり、しかもゼウスでありながら／今日は葬いといういうことだ。」「夜鴉の謡は／死をもたらすという／だがデエモフィロスが、／歌を唱ふと、／その夜鴉が死んじまふのだ。」

非常なやぶ医者ってことですね。

ところで、バラダースっていう詩人はですね、文法家（古典語教師）なんです。しかも貧乏だったらしくて、いろんなことを書いています。この人ぐらいで、一応古代はもう終わるんですね。この人の詩の中から 1 つだけ読みますと、16 ページの一番上、

「ゼウスの息子（ヘーラクレース）を三叉路で見て驚いた。以前には厚く崇められていたのに、今は路傍に倒れている。腹を立てて僕はいった。『三つの月の、凶事からの守護者よ。あなたは以前には決して敗失しなかったのに、今や放り出されているんですね。』夜になると、神が微笑みながら私の傍らに立って云った。なる程、私は神には違いないが、時勢には仕えることを学んだの

だよ。」

これは、辻邦生さんの『背教者ユリアノス』とかね、いわゆる、古代末期の、コンスタンティヌス大帝のニカイア会議以降のキリスト教が当時の世界を支配した後の、いわゆる異教っていうか、古代の宗教が黄昏れていく姿なんですね。最後は、

「文法教師の娘が情人と寝て子供を生んだ。男性とも、女性とも、中性とも云えるものを。」

これはいかにも文法家だと思うんですが、やはり時代なんですね。で、下の方に古代のエピグラム。エピグラムっていうのはなにも滑稽なものだけではないんですね。抒情詩も載せられるし、悲壮なものもある。これの典型は、例のいわゆるペルシャ戦争の時のシモーニデース【Σιμωνίδης, 前 556-468 年】の詩ですね。

「テルモピュライなる／スパルタ人の墓銘に、行人よ、ラケダイモンの国びとに／ゆき伝えてよ／この里に／御身らが言のまにまに／われら死にきと」

と。これは呉茂一先生の訳です。ですから、エピグラマタっていうのはやっぱり vehicle なんですね。だから、叙情ものせられるし、歴史ものせられるし、風刺ものせられると。さて、現代との繋がりを考えますとね、土曜美術社の『詩と思想』という例の雑誌なんですね。89 年の 9 月号ですけど、「小さな国々の大きな詩人たち」という特集がありまして、セフェリスとか色々取り上げてくれたんです。これに「アレキサンドリア人カヴァフィス」、副題に「ギリシャ詩華集から咲き出た孤独の現代詩人」というタイトルで書いたんですが、ギリシャの詩っていうのは要するに、一見、古代の末期で途切れてるんですね、途中ずっと。だけど、どうもそれを引き継ぐ現代の詩人たちが出てると。で、セフェリス【Γιώργος Σεφέρης, 1900-71 年】はその一人だと思うんですね。セフェリスは、前『プロピレア』に書いたことあるかな【「セフェリスのバイディアー幼少時代の父と子」『プロピレア』1 号、1989 年】。お父さんからペルシャ戦争の話を、もう生まれた時から叩きこまれてるんですね。つまり、ペルシャは何故敗北したのか、ペルシャ王キュロスは「ヒュプリス（慢心）」に捉え

られて、ヘレスポントス海峡に船の橋をかけようとしたが、意のままにできなかったんで、海面を鞭打たせた。それはまさに、「ヒュブリス」であり、神の怒りを買う。そのネメシス（応報）として、結局ペルシャ戦争に敗北する。これがまあアイスキュロスのペルシャ人のテーマですよ。そういうことを盛んに言っている。で、キプロスのサラミスに関するセフェリスの思想もやっぱりそれで貫かれているんですね。キプロスのサラミスというのは、いわゆるアテナイのサラミスとは関係のない地名ですけど、セフェリスはそれに引きつけて歌を歌ってるんじゃないか。セフェリスにとっては身近な例があるんですね。例のヴェニゼロス【Ελευθέριος Βενιζέλος, 1864-1936 年、著名な政治家】ですか、第一次大戦後で、ギリシャは「メガリ・イデア Μεγάλη ιδέα」という帝国主義的な発想【ビザンツ帝国版図の復活】に捕らわれて、やっぱりかなり無理をしたわけですね。で、ケマル・アタテュルク【Kemal Atatürk, 1881-1938 年、トルコ共和国の建国者】の反撃を受けて、例のスミルナ（現イズミール）の悲劇が起こるわけですね。あの辺のことをやっぱり結び付けてる。それから、その中間にあるナバリノの海戦【1827 年、英仏露連合軍がエジプト・トルコ軍を破った戦い】とか、何回もイスラム社会とやってますよね。ああいうのが、なんか頭に残ってるんじゃないか、というのがその論旨です。で、セフェリスがカヴァフィス【Κ.Π. Καβάφης, 1863-1933 年】のことをね、最初はカヴァフィスというのはむしろ古いタイプの詩人で、例えば『ギリシャ詩華集』の流れにある詩人だってとらえてたらしいんですね。1つだけやってもうやめますが、カヴァフィスの中に「アカイア同盟のために戦った戦士たちに」という詩があるんですね。

「上昇のつわものどもを恐れず勇敢に戦って華々しく散って行った諸君。デイアイオス、クリトラオスに敗軍の責ありとする諸君。もとより諸君の咎にあらず。ヘラス人が他に誇らんとする時、諸君を指して、かかる者たちを我が民族は生み出せりと称えるだろう。アレクサンドリアにて、アカイア人これを記す。時にプトレマイオス・ラシロスの治世第7年」。

これは、セフェリスが「カヴァフィスとエリオット『比較の試み』」というエッセイの中で、要するに、『ギリシャ詩華集』との著しい統一性を思わせたと言っている。しかし、この詩は実際にはですね、世界大戦前後に、一ここんとこちょっと読んでみましょう。「年月が過ぎました。ある夜、灯火管制下」世界大戦ですよ。「アレクサンドリアで、クレタの戦闘の数日後に、私はこの

アカイア人のエピグラムを思い出しました。おそらくこの理由で、おそらくブトレマイオス朝の都に私が当時いたという理由で、私はこの詩全編を一人低い声で口ずさんでいました。詩末の意味深長な詩行もです。そして、その時突然、その時初めて、この詩が1920年小アジアのカタストロフィの前夜に書かれた意味が分かったのです。」ということを書いてるんですね。やはり現代と結びつけている。「もはや、カヴァフィスは時代の断絶を飛び越えて、『ギリシャ詩華集』に独自の地位を占める」だから、『詩華集』の系列の詩人であっただけではなく、現代につながり、息づいている詩人であると言い切っているわけです。「もはや彼は冷たいままなパルナシアン風のポートレート画家ではなかったのです。そのかわりに、今や、私の同時代人であり、最大限可能な簡潔さと明確性をもって感情を表現する道を発見した人物であり、シモーニデースを呼びよせ、古代のかの輝かしいエピタフをして、墓地を離れ、私のもとに来たことを可能にした人物なのです。それは生き生きと現存するものであり、プサラ島の破壊の際の、ソロモスの詩編にも感得される実在なのです」こういうことで、現代ギリシャの詩人の中にもやっぱりそういう一途中の断絶はありますがー例えば『ギリシャ詩華集』の流れ、特に、セフェリスはアイスキュロスに傾倒してますから、そういう思想の流れ、それと、例えばセフェリスについて言いますと、いわゆる現代詩人、アンリー・ミショーだの、エリオットだの、またロレンス・ダレルやヘンリー・ミラーと親交があったのです。現代の世界文学の中で発想し、同じような、その時代の文学運動に身を投じているといえるわけです。セフェリスが初めて、いわゆるフリーヴァース（自由律の詩）を書いたっていうのも、その流れですよ。それとやっぱり、古代のそういうものをしっかり受けついで、やはり古代以来の詩の伝統、特にセフェリスは、預言者的、あるいは教育的な自覚を持った人だったんじゃないかな、というのは僕の考えなんです。どうも長くなりました。

（本稿は1998年7月18日の研究発表会で行なわれた特別講演にもとづいている。
なお【 】は編集部が補ったものである。）